

平成27年度第3回紀南地域高等学校活性化推進協議会議事録

日 時 平成27年11月24日（火）18：30～21：00
場 所 熊野市文化交流センター 交流ホール
出席委員 大森 達也（会長）、莊司 祐介（副会長）、中田 貴也、大井 隆、
田尾 友児、倉本 勝也、西 章、榎本 健治、寺本 幸治、
檜山 祐一、久保 治也、廣畑 勝也、徳田 佳郎、甫本 紀人、
山本 健司、寺本 育史、谷合 徹、堀川 恭太、新谷 武文
欠席委員 生駒 亮哉
（事務局） 教育政策課長 宮路 正弘、高校教育課長 長谷川 敦子、
教育政策課長補佐兼班長 辻 成尚、
教育政策課 上村 和弘、宇陀 和彦、西 達夫

（事務局）

皆様方におかれましては、ご多用の中、ご出席いただきありがとうございます。ただいまから、平成27年度第3回紀南地域高等学校活性化推進協議会を始めます。

まず、お手元の配付物を確認させていただきます。事項書が表紙の2カ所留めの配付資料と座席表です。この2つについて不足等ございませんでしょうか。

なお、開催案内の文書でもお知らせしましたが、本協議会は公開で行っています。議事録作成の都合上、音声を録音しておりますことをご了承いただきますとともに、ご発言等はすべてマイクを通していただきますようご協力をお願いします。

それでは、事項書に沿いまして、進めさせていただきます。

まず、開会にあたり、三重県教育委員会事務局教育政策課長 宮路正弘からご挨拶申し上げます。

1 あいさつ

（事務局：宮路教育政策課長）

夜分お疲れのところ、第3回紀南地域高等学校活性化推進協議会にご出席いただきましてありがとうございます。

9月10日に開催しました第2回協議会におきましては、将来的に新たな学校を設置する場合の学校像にかかわりまして、設置する学科についての協議、及び新たな学科を設置する場合の設置場所についての検討をいただきました。いずれにつきましても、協議会として一定の方向性をとりまとめていただくには至っておりませんが、前回、ご要望のありました情報等について、資料等でお示しさせていただきますので、本日も引き続き協議を深めていただければと思っています。

なお、前回も申し上げましたとおり、新たな学校を設置する場合の設置場所についての検討においては、所有者への迷惑等いろいろな混乱につながる恐れもあることから、字名等具体的な地名を挙げることは控えていただきますようお願いいたします。

本日も21時までという限られた時間ではございますが、子どもたちにとってよりよい学習環境の整備につながるよう、活発にご協議いただきたいと思います。

本日もどうぞよろしく申し上げます。

(事務局：西)

生駒委員につきましては、急な公務が入られたため、本日、ご欠席との連絡をいただいております。

それでは、大森会長からご挨拶いただき、その後の議事進行をお願いします。

(大森会長)

今年度の協議会も3回目になりました。1回目の時期には高大接続改革の話やアクティブ・ラーニングということもあり、どういう教育がいいのかということも検討してきました。この1年、高大接続改革ということでいろいろと教育改革が進んできています。

私は大学生を社会へ送り出す立場にありますが、特にこの数年間、大学生の採用を取り巻く状況は急激に変わってきています。面接や書類審査の書類にも工夫が必要となってきています。工夫が必要というのは、単なる履歴書ではなく、グループで頑張ってきたこと、自分で頑張ってきたこと等も書かないと相手への十分なアピールとはならない。あるいは、面接においてはグループディスカッション、グループワーク等があったり、会社によっては文系の学生であったとしても、取扱説明書を読みながらものを組み立てるといようなテストがあったりします。社会が求める人材が変わりつつある中で、高校卒業者の採用活動も変わってきていると聞いています。

つきましては、そういう背景があることも踏まえていただきながら、本日の協議をお願いしたいと思います。本日は前回の協議を振り返った後、新たな学校に設置する学科の協議と、新たな学校を設置する場合の設置場所についての検討を進めてまいりたいと思います。

1点目の設置する学科につきましては、前回の議論でおおむね2つに絞られているのではないかと考えています。1つは普通科と総合学科、もう1つは進学を意識したコースや職業に関して専門的に学べるコースを設置した普通科です。生徒の進路実現や、地域の人材育成といった社会的なニーズに応えられる学科の形について、地域の特色や地域資源の活用といったことも視野に入れながら、協議を進めてまいりたいと思います。そして、一定の方向性をまとめていければと考えています。

2点目の新たな学校を設置する場合の設置場所につきましては、前回、あまり時間をとれませんでしたので、今回は十分に協議を深めてまいりたいと思います。前回同様に通学状況、これまでに共通理解されている教育内容、防災面、地域振興への影響等も含め、さらにこの場でご提案いただいた観点等も入れながら、比較・検討してまいりたいと思います。

ただ、先ほど宮路課長のお話がありましたように、この協議会で設置場所を決めるものではないですし、具体的な地名等をあげていただきますといろいろと問題が起こりますので、その点にはご注意ください。

本日の時間設定も21時までとなっています。長時間となりますが、ご協力をお願い

いします。

それでは、事項書の「2 確認・報告事項」に入ります。まず、(1) 第2回紀南地域高等学校活性化推進協議会における主な意見について、事務局から説明願います。

2 確認・報告事項

(1) 第2回紀南地域高等学校活性化推進協議会(9/10)における主な意見

【資料1】

(事務局：辻班長)

資料は1ページ、2ページをご覧ください。2ページの資料2はこれまでも見ていただいている学校像のたたき台ですが、「2 学校のイメージ」の一番上の部分です。「上級学校への進学を目指す普通科」というところと、「自らの進路を探究し、実現を目指す学科」というところで、新しい学校にはどのような学科を設置し、どのような教育内容にしていくといいのかということを前半に協議していただきました。

では、資料1をご覧ください。「新たな学校に設置する学科や教育内容」ということで、まず1つ目は、進学に対応する普通科と、生徒自らの学習ニーズに応じて選択することができる総合学科のような学科がいるのではないかというご意見。2つ目は、中学校卒業段階では将来の進路目標を明確に持っていない子どもが多い現状があることから、高校入学後に将来の進路について考えながら、必要な教科・科目を選択できるように普通科の中でさまざまなコース選択ができる形が望ましいというご意見。大きくこの2つだったと思います。そのほかに3つ目としては、高校進学で他地域へ流出しない、ほかの地域の高校に進学していかないように、大学への進学を明確に打ち出した普通科は設置しなくてはいけないだろうというご意見。4つ目として、ほかの地域からも生徒を呼び込めるように特色を持った専門学科、もしくは特色のあるコースを設置できる学科がいいのではないかというご意見でした。

学校の設置場所については、協議の時間があまりありませんでしたが、3つにまとめてあります。まずは、熊野市、御浜町、紀宝町について、どの地域に子どもの数が多いのかということも考慮した場所への設置が望ましいというご意見。次に、両校の中間的な場所に設置し、バスがなければ運行させるなど通学が可能となるようにして、津波に対しての安全面を考えた場所がいいのではないかというご意見。そして、どの場所に設置しても、現在の学校がなくなれば、その地域の活力が失われることにつながるので、各市町の行政や地域とともに考えていく必要があるのではないかというご意見をいただきました。

(大森会長)

ただいまの事務局からの説明に対して、ご質問あるいは付け加えるようなことがありましたら挙手をお願いします。

それでは、次に進めさせていただきます。事項書「3 協議事項」に入ります。まず、「(1) 将来的に新たな学校を設置する場合の学校像等について」の「ア 学科等について」です。資料としては前回と同じものですが、事務局から補足等があれば説明願います。

3 協議事項

(1) 将来的に新たな学校を設置する場合の学校像等について

【資料2～3、参考資料1】

ア 学科等について

(事務局：辻班長)

前回と同じ資料です。2ページは先ほど見ていただきましたが、学校像のたたき台です。特に引き続き議論をいただきますのは、学校のイメージのところの一番上の学科のことで、どのような学科を設置するかということですが、前は、18ページの参考資料1で総合学科や専門学科の内容について、少し時間をかけて説明させていただいたうえで協議していただきました。この説明は繰り返しません、総合学科、専門学科について考えていただきながら議論していただき、専門学科については1つの学科で生徒40人を集めるのはなかなか難しいのではないかとのご意見もあったと思います。

そこで、先ほど紹介したご意見のように普通科と総合学科がいいとか、普通科の中でいろいろなコースを設けてはどうかというご意見がありましたので、そのような学科を置いた場合の学校のスタイルをもう少しイメージしていただきやすいように、今回は新たに3ページの資料3を用意しました。合わせてどのような長所や短所があるかということも考えていただきたいと思います。

まず、資料の3～5ページにかけて1番から6番まで並んでいます。1番と2番が普通科と総合学科を置いた場合です。1番と2番では普通科の形が違いますので、共通している総合学科のほうから説明していきます。

新しく設置する学校は、おおむね6学級ぐらいになるだろうということで、仮に1つの学校を6学級として普通科を3学級、総合学科を3学級という形でイメージしていただけたらと思います。その場合の総合学科ですが、スペースの関係で4つの系列を入れています、3学級でもそれ以上の系列を置くことは可能です。今の木本高校も総合学科は2学級、80人ですが、4系列置いています。どのような系列を置くかということは、この地域でどのような教育が必要かということと考えていくべき中身だと思います。

総合学科については、1年次、普通科の学習に加え、科目「産業社会と人間」とあります。この「産業社会と人間」というのは、前回も説明しましたが、授業で職業や産業について調べたり体験したりする中で、2、3年次にどのような学習をしていくかという履修計画を立てていく授業です。1年次は全員が「産業社会と人間」も含めて同じ学習をして、2、3年次で系列を選ぶということになります。

一方、普通科のほうですが、1番と2番で少し違う形になります。1番は、1年次に全員が同じ学習をします。2番のほうは、「進学特化コース」と「通常のコース」と書いてありますが、入学時から2つコースがあり、それを選ぶということです。1番のほうは、今の木本高校のスタイルです。普通科は一括で募集しています。2番のように普通科の中でコースに分かれているのは、尾鷲高校の「プログレッシブコース」というコースの形です。わかりやすいように「進学特化コース」や「通常のコース」

という書き方がしてありますが、上の※印の2つ目ですが、「進学特化コース」というのは、国公立大学や難関大学への進学指導に特化したコースで、「通常のコース」としているものは、四年制大学を目指す生徒もいるだろうし、短期大学、専門学校、就職を目指す、多様な進路に対応する普通科です。1番のほうは入学時に一緒に選抜し、2年次からコースに分かれます。そのコースもスペースの都合上、3つになっていますが、3学級だから3つということはなく、4つ、5つというコースも考えられます。例えば、「進学特化コース」の理系・文系のほかに看護系のコースがあったり、もしくは、基礎力を高めることを目指すコースがあったり、基礎力を高めながら進学を目指すコースがあったり、就職を目指すコースがあったりという形で、3つ以上のコースになることがあります。コースがいくつかできた場合でも、例えばホームルームではいくつかのコースをまとめたり、体育の時間は一緒でも、英語や数学の時間ではそれぞれのコースごとに授業を受けたりすることになります。

2番のほうは、入学時からそれぞれのコース別に募集するという形ですが、1番と2番とどういうところが長所でどういうところが短所なのかということ、それぞれの下のところにもまとめました。まず、1番の下の方の長所というところをご覧ください。普通科では入学後に自己の進路について十分時間をかけて考え、2年次からのコースを決めるということです。1年次では共通の学習をするので、その1年間で十分考えて、2年次からのコースを決めることができます。

その反面、普通科の1年次は全員が同じ内容を学習するということになりますので、「進学特化コース」を選択しようとする生徒にとっては内容が十分でなかったり、中学校での学習の習熟度が十分でない生徒にとっては難解な内容になったりすることが予想されます。例えば、中学校では教科書は採択地区ごとに同じものを使っていますが、高校の場合は、その学校もしくは学科によって、例えば、中学校の復習から入って基礎的な内容をしっかり固めることに重点を置いた教科書もあれば、大学進学等を見据えてかなり発展的な内容を取り扱っている教科書もあります。この地域の中で一つの高校になるわけですが、この1番のような形をとると、普通科に入った生徒は全員が同じ教科書で同じ内容を学ぶことになります。そうすると、短所として考えられるのは、今言いましたように、2年次から「進学特化コース」に進みたい生徒にとっては、少し易しすぎる内容になるかもしれませんし、中学校の学習内容が十分でない生徒にとっては、難しすぎる内容になることも考えられるということを書かせていただきました。

2番のほうの長所としては普通科の1年次から「進学特化コース」、「通常のコース」に分かれているので、進路希望や習熟度に応じた学習を行うことができるということです。「進学特化コース」、「通常のコース」にそれぞれ共通の学習とありますが、普通科が入試の段階で2つに分かれるので、それぞれの習熟度に応じた授業を行うことができ、教科書も変えたりできるということです。ただ、1年次から分かれてしまいますので、学ぶ科目や時間数も異なります。また、「進学特化コース」のほうは1年次に例えば数学等の学習において、2年次の内容を一部先取りすることも考えられますので、2年次から学科やコースの変更はできなくなります。

3番と4番については、普通科のところは同じですが、総合学科ではなく専門学科

という形で考えてみました。今回は専門学科については、1学級の定員である40人が集まりにくいのではないかというご意見もありましたが、あり得る1つの形としてお示ししました。専門学科のところはスペースの都合上、2つの学科になっています。この東紀州地域でしたら尾鷲高校は普通科のほかに情報ビジネス科という商業の学科とシステム工学科という工業の学科を設置していますので、4番の形になるかと思えます。専門学科ですので1年次から専門教科の学習が始まります。そして2年次からコースに分かれる学校もあれば、小さいところでは分かれなところもあります。例えば工業系の学科では、機械系、電気系というようにコース名を示してなくてもコース等に分かれることもあります。商業でも情報関係、会計、流通等のコースに、農業でも生産や土木、園芸等のコースに分かれる形態をとっている学科もあります。

この場合の長所・短所ですが、長所については3番の普通科の部分は1番と同じです。専門学科では1年次から専門的な学習の内容を行いながら、進路希望に応じて2年次からのコースを選択します。短所については1番と同じです。4番の長所・短所も2番と同じですが、専門学科のところだけは、1年次から専門的な学習を行いながら、進路希望に応じて2年次からのコースを選択するということがあげられます。これは3番と同じです。

次に5番と6番についてです。今度はもう一つのご意見にありましたように、学校全体が普通科だったらどのようなイメージかということを表しました。5番のほうは一括して普通科として募集する形です。1年次は全員が同じ学習をして、2年次からはいろいろなコースに分かれるというものです。例えば、ここでは例としては「進学特化コース理系」とか、「進学特化コース文系」と書いてありますが、そのほかにも国公立や難関大学を目指さないが四年制大学を目指すコースもあれば、看護系のコースもあったり、専門学校、就職を目指すコースもあったり、福祉や情報などの科目を入れてあるコースもあると思います。進路に関してだけではなく、あくまでも普通科の授業の範囲内で情報や福祉などの関係の科目を入れたコースも学校によっては設置しています。

6番は、「進学特化コース」だけ別に募集する、つまり、入試のときに「進学特化コース」と「通常のコース」と別に募集するというものです。これも文系・理系と2つ書いてありますが、必ずしも2学級ではなく、1学級の場合もあります。1学級の中で文系・理系に分かれることもあります。ですので、数については、この図にこだわらないようにしてください。

こちらの長所・短所も先ほど説明したものと同じようなものになりますが、5番の長所は、入学後に自己の進路について十分時間をかけて考え、2年次からのコースを選択できるということです。入学してから1年間勉強する中で選択することができるということです。

ただ、短所としては、地域に1つの学校になった際に、1年次に全員が同じ教科書で、同じ学習をするということなので、将来的に「進学特化コース」を選択したい生徒には、内容が十分でなかったり、言い方を変えれば物足りないということになったりします。一方、中学校での学習の習熟が十分ではない生徒にとっては、難しくなることが予測されます。

6番になると、「進学特化コース」と「通常のコース」に1年次から分かれているので、それぞれの共通の学習では、それぞれ違った教科書を使用することができます。また、「進学特化コース」のほうは2年次の学習内容を先取りすることも考えられ、それぞれのコースにおいて進路希望や習熟度に応じた学習を行うことができます。

一方、短所としては、1年次の共通の学習において学ぶ内容が異なりますので、当然2年次からコースを変更することはできません。

最後になりますが、前回の協議の中で、例えば、普通科と総合学科を置いた場合と、普通科だけの場合とで、教員定数はどうなるかというご質問があったと思います。教員定数はいろいろな状況によって異なります。わかりやすい例として、新規採用の教員が何人かいると教員数が増えます。ほかにも、学校として進路指導や生徒指導などの事務局に当たっていたり、何かの研究開発などを引き受けたりする場合、配置する教員を増やすこともありますので、一概に何学級で何人の教員ということは言えません。ですので、具体的な数字を資料にすると誤解が生じますので資料にはしませんが、大体、1番のような普通科と総合学科が3学級ずつあったとすると、校長、教頭を除いて48人ぐらいになる見通しです。

では、5番や6番のように普通科だけならどうかというと、単位制の場合は先ほどと同じで48人ぐらいになる見通しです。ですから、1番・2番と5番・6番については、ほぼ同じというところです。ただ、普通科が単位制でない場合は、3～4人少なくなる見通しです。

今、各学年6学級、つまり学校全体で18学級あると想定して話をしましたが、もしこれが各学年5学級になったときには、38～39人ぐらいになるものと予想されます。ただ、1番と2番では普通科のほうで2学級になってしまうと、普通科単位制の効果が薄くなるので、もう少し少なくなって36～37人になる可能性があるようです。

3番と4番の専門学科については説明しませんでした。専門学科については、例えば工業系の専門学科か商業系の専門学科でも人数が違ってきますので、一概には言えないということです。

以上、イメージしていただきやすいように資料をお示しさせていただくのと合わせ、前回ご質問いただいた部分について説明させていただきました。

《協議、意見交換等》

(大森会長)

ご意見を伺う前に確認ですが、前回まででこの何年間の間でこういう学校をつくるときに、地域資源の専門家や各種事業所等にも参画していただいた職業教育の展開を重視する学科は必要だろうということは、これまで議論の中であったので、総合学科、普通科という議論が出てきていると考えています。

もう一つは、これは何度も繰り返しになりますが、国が非常に早いスピードで教育改革を進めており、学科については、最終的に三重県教育委員会が判断し決定することになりますので、ここでは皆様のご意見をお伺いしたいと思います。

私から先に質問をさせていただきます。1つ目は、総合学科の場合は系列をいくつでも増やせる。でも、専門学科の場合は、例えば、この場での議論でも福祉、介護、観光とかいろいろな議論が出てきましたが、私たちが意見を出して、一度、三重県教育委員会で決められると、学科の再編はそんなに簡単にはできないと考えていいのでしょうか。一方、総合学科や普通科の中にいろいろなコースを設ける場合だと、時代に応じて教育内容を変えやすいという判断でいいのでしょうか。専門学科と決めてしまうと、学科をつぶして新しくつくるのは、いろいろな問題が起きますが、総合学科や普通科のコース制であれば、この地域の特性なり人口構造が変わったときに、今の制度上、臨機応変に県教育委員会と高校との間で変えられる。だけど、学科として決めてしまうと難しいのかという質問です。

(事務局：辻班長)

専門学科であっても、時代が変わって生徒の学びたいニーズが変わったら、工業とか商業という大枠は当然ありますが、中身を若干変えていくことはできます。ただ、大きな変換は難しく、工業が急に別の学科になるようなことはないと考えます。

(大森会長)

私の言いたかったのは、例えばシステム工学科、あるいは情報ビジネス学科で2つ学科にしておいて、今は介護が必要だから福祉学科をつくるということは難しいわけですね。

(事務局：辻班長)

それはなかなか難しいです。

(大森会長)

総合学科とか普通科のコースだと臨機応変に対応しやすいということですね。

(事務局：辻班長)

例えば、総合学科の高校でもそうですが、系列は状況や特性によって学校と協議しながら変わってきています。

(大森会長)

飯南高校などはそういうケースですね。

2点目にお伺いしたかったのは、例えば入学式の直前や集合日の前後にもう一度プレースメントテストをして、習熟度別に分けることも高校では可能ですか。

(事務局：宮路教育政策課長)

状況は違うと思いますが、県内のある学校では、いくつかの学科を一度に募集する「くくり募集」を行っています。普通のくくり募集というのは、1年次に共通科目を履修しながら、2年次から自分の進みたい学科やコースに進みます。例えば、工業なら電気科や機械科等いろいろな学科を一括して入学試験をして、極端に言いますと、2年次からそれぞれの科に分けている学校があります。また、入試が終わった後の登校日に希望を聞いて面談をして分けている学校もあり、それが実態に合うかという問題は出てくる可能性があります。全く不可能ではないと思います。

(事務局：辻班長)

一般的に普通科では習熟度別に学級を分けることはあまりしていません。ただ、最初にテストをして、英語や数学などの科目に関しては、それぞれの習熟度に

あったような学習ができるようにすることはありますが、習熟度別の編成をするにしても、同じ教科書を使っていくということです。

(大森会長)

ここまでにつきましてご意見等をいただきたいのですが。

(廣畑委員)

説明をお伺いして、1番か2番であれば、どちらかといえば2番のほうがいいのかと個人的に思います。それは、「進学特化コース」を選ぶ人は、早ければ小学校からそういうところを目指していると思うので、2番のほうがいいのではないかと思います。

3番と4番のところですが、専門学科の2年次・3年次という2年間の学習で、私は専門的なことはわかりませんが、そういう教育をされておられる学校の生徒たちの就職は順調にしているのかどうか、教育を受けている生徒たちは力をつけてその学校を巣立っているのかどうか、率直に教えていただきたいと思います。

(大森会長)

私も総合学科と専門学科で就職の違いもあるのかということも教えてもらえればと思います。

(事務局：長谷川高校教育課長)

総合学科と専門学科で就職に大きな違いはないように思います。ただ、置いている系列が違いますので、工業に来る求人と総合学科に来る求人は、変わってくると思います。就職率という意味では大きな違いはないと思います。

(大森会長)

廣畑委員の質問は、専門学科という形で分けた場合の3番や4番のケースでの就職状況はどうかということですが、それほど大きく変わらないですか。

(廣畑委員)

もう少し具体的に聞きたいのですが、いいところから求人が来ますか、いいところへ就職できますか。

(大森会長)

いわゆる東証一部上場の企業からも求人が来るかということですね。

(廣畑委員)

就職だけではなく、子どもたちが世の中に出ていく段階において、専門的な知識を十分つけているかどうか。就職は置いておいてもいいですが、子どもたちがそれだけの力をつけていたら、あとは子どもたちの力で生きていけると思うので。力のつき具合を教えてください。

(事務局：宮路教育政策課長)

3番、4番の専門学科のところでおっしゃったのかと思いますが、一般的な専門学科の学習形態はこれです。工業でも農業でもコースに分かれるか分かれないうのはありますが、コースに分かれない工業の機械科であれば、コースがなくても普通科の学習と学科に関する専門的な学習を1年次でやって、2、3年次で機械なら機械の専門をやっていくのが今のやり方です。学校によってはコースを設けているところもあります。どこまで専門的な知識が身につくかは計りかねますが、それを期待する求人は、それぞれ関係する業界からはたくさん来ています。

それと、一つの尺度として、例えば、社会人でも難しい国家資格の合格者数について、三重県内の専門学科の高校は、それぞれかなり実績をあげています。介護士の資格を取ったり、工業であれば技能士という資格を取ったり、いろいろな面でそういう部分のきちんとした技術や知識の習得は進んでいると考えます。

（樫山委員）

まず、資料3は大変見やすくわかりやすい、検討しやすい資料をつくっていただきありがとうございます。

大森会長の先ほどの質問の確認です。入学してすぐに試験をしてコース選択ができないかということだったと思いますが、回答がよくわからなかったのですが、1番と2番との大きな違いというのは、2番のほうは入学者選抜が2種類あるということですね。もし、1番の形で入学者選抜をして、1年次で既にコースに分けたなら、2番の短所を補うことができるし、長所そのまま生かせると、単純に考えたのですが、それが実現できるのかできないのかよくわかりませんでした。

（大森会長）

私がイメージしているのは、津東高校のFとSの違い。確か入試のときは一緒ですね。それで、入学直後に分けますね。それをイメージして質問したのですが。

（事務局：長谷川高校教育課長）

分けることは可能だと思います。ただ、テストで分けるか、生徒の進路の希望によって分けるのか、いろいろな考え方があると思います。ほかの普通科の学校で、一緒に入学者選抜をして、入学後すぐに就職希望か進学希望かを聞いて、希望によって学級を分けているところがあります。ただし、その場合、大規模な学校では割と人数がいるので学級編成ができますが、学校の規模によっては進学希望が20数名しかないのに対して、就職希望がもっと多いというように、アンバランスが出てしまう可能性はデメリットとしてあります。

（樫山委員）

ということは、1番と2番の間にあるのが新たな形として、入学者選抜は1本で、入学後すぐに「進学特化コース」か他のコースに1年次から分けていくことは可能ということですね。

（大森会長）

それでよろしいですか。法律上又は制度上、可能かどうかということですが。可能ということでもよろしいですね。

（事務局：宮路教育政策課長）

制度上は可能です。

（樫山委員）

可能であれば、そういう形のほうがいいと思います。1番では短所に書いてもらっているようなことがありますし、2番のほうは、入学者選抜が分かれているので、途中でコースを変更することもできない。その両方の短所を補うことができると思うので、その形も付け加えてもらえたら、5番や6番についてももっと考えやすいかと思っています。

(大森会長)

しかし、その場合でも、教科書は変えられないという問題があります。先ほどの説明では、「進学特化コース」と「通常のコース」で分けると教科書が変えられけれども、入学してからでは1番の共通の学習の形になるので教科書が変えられないという問題は生じてくると思います。

(事務局：長谷川高校教育課長)

例えば、1学級だけ進学に特化した学級をつくるというように決めてあれば、前年度中に文科省へ次年度の教科書の需要数報告をするのですが、その学級の分の教科書を変えることは可能です。しかし、成績をつけるときに、コース別に入学者選抜をしてないので、課題が出てくるとは思います。

(櫻山委員)

私が言ったのは、木本高校が取り組んでいるように、入学者選抜が1本で1年次からコースを分けて進めているかの確認です。

(谷合委員)

今の1・2年生については、普通科は文理コースと文系コースでスタートします。合格者発表の翌日に合格者登校日があるので、そのときに英・数・国を中心に行うテストと、文理コースを希望するかどうかという2つの要素で決める形です。

(大森会長)

文理コースも文系コースも教科書は一緒ですか。

(谷合委員)

すべて一律というわけではなく、教科によって様々です。違うところもあります。

(莊司副会長)

今のコースを分けるときの方法を入学者選抜のときに行うのは可能ですか。

(大森会長)

それが、2番のケースです。

(莊司副会長)

2番が入学者選抜のときに行われる形なのですか。今の話では、入学後にもう一度テストをして、その成績云々でということだったと思いますが。

(寺本^幸委員)

莊司副会長が言われるのは、入学者選抜の成績でということですね。

(莊司副会長)

入学者選抜の成績プラス受検者の意志でコース分けができないのかということですか。

(事務局：宮路教育政策課長)

それは普通科全体で入学者選抜を行い、その点数によってコースを決めることが可能かどうかということによろしいですか。

(莊司副会長)

入学者選抜を受ける時点です。

(事務局：宮路教育政策課長)

入学者選抜の結果によるコース分けも不可能ではないと思います。それが子どもたちの理解を得て、仕組みとしてきちんと整えてあれば、入学者選抜の点数や面接によ

り自分の行きたいコースの希望を聞いて、判断していくことは可能だと思います。ただ、希望が全部満たさせるかどうかについては、希望者が多い場合には難しいケースが起こる可能性があります。

(榎山委員)

先ほど確認をさせていただきました。私はこれまでもずっと学校が1つになっていくので、いろいろな子どもたちのニーズに対応できるようなコースをたくさんつくる。その中で大学進学もできるし、就職もできるというようなことをずっと言っています。それがこれまでは総合学科の中にいろいろなものを入れていくほうがいいと思っていましたが、これまでの議論の中で国公立等への進学を目指すのであれば、普通科でないといけないということで、5番や6番のパターンで私がこれまで要望していた内容が満たされているかと思えますし、先ほど質問した5番や6番に、さらに入学者選抜が1本で、入った段階で1年次から自分のコース選択をし、いろいろな生徒のニーズに応えてもらえる学科の普通科の設置がいいと思えました。

(久保委員)

質問ですが、2番の場合に、この地域の現状を見ますと、1年次で共通の学習をして、2年次からコースに分かれるというのは非常にいいように思いますが、ただ、学力が高く難関大学等を目指す生徒にとっては、1年次の共通の学習は非常に不利になるのではないかという感じがします。今、実態として1学級分ぐらいの人数が近大附属新宮中学・高校へ行くのは、大学進学を目指しているからなので、どちらかと言えば2番を推薦したいという気持があります。

そこで2点質問があります。もし、2番の形で「進学特化コース」を1学級とした場合、2年次・3年次に理系・文系と2つに分かれるとして、理系が10人、文系が30人というアンバランスなことになっても全然問題がないかということと、もう1つは、入学者選抜が別になることで「進学特化コース」の定員40人のところへ50人の志願があり、普通科の「通常のコース」80人のところへ90人の志願があった場合、「進学特化コース」の中で10人不合格、普通科の「通常のコース」でも10人不合格となる状況で、「進学特化コース」を不合格となった人が、普通科の「通常のコース」に合格することは可能でしょうか。

(事務局：辻班長)

今でも入学者選抜は前期選抜と後期選抜を実施していますが、前期選抜は定員の何割かをとりませんが、そこでは第1志望の学科だけしか志願できません。しかし、後期選抜は第2希望まで書くことができます。ですので、久保委員がおっしゃるように、「進学特化コース」が40人の募集に対して50人の志願者があった場合、第1希望である「進学特化コース」を不合格となっても、「通常のコース」か総合学科を第2希望に書いてあれば、そこで判定をしてもらえます。

また、最初の質問ですが、「進学特化コース」が1学級40人とすると、さらに理系・文系に分かれますが、例えば、理系が10人で文系30人ということはありません。例えば、数学は理系の10人で授業をすることもありますし、文系の30人で授業をすることもあります。体育等是一緒にしたり、国語や社会などで文系も理系も同じ単位数、同じ時間数の科目では一緒にしたりすることもあります。ただし、物理や

化学など理系特有の難易度の高い内容の授業や、文系の英語の選択科目などはどちらかしかないので、10人でも別々に授業を行います。

(山本委員)

資料の中で1番と5番を比べたときに、普通科と総合学科を置いているのと、普通科の中で分けているという違いがありますが、5番のコースに分けることによって1番と比べた場合にメリットがあるかということと、普通科と総合学科を置くほうが何かメリットがあるのか教えていただきたい。

(大森会長)

普通科と総合学科を設置する場合と、総合学科的なコースを普通科の中に置く紀南高校のような形とを比べて、どちらにどのようなメリット・デメリットがあるかということですか。

(山本委員)

教員数については、あまり変わらないということで、それ以外のところでどんなメリットがあるのか。

(事務局：宮路教育政策課長)

簡単に言いますと、普通科、総合学科、専門学科といくにつれて、専門教育、特に職業教育の内容は濃くなっているというイメージで捉えていただいたらどうかと思います。ですので、普通科をベースとした場合には、それほど多くの職業科目を入れることはできません。専門学科と普通科の間にあるのが総合学科ですので、総合学科にはかなり専門的な内容が入れ込めるという違いがあります。就職などに対応していくときに、普通科のコースで就職向けのコースとして専門的なニーズにどの程度対応できるかという懸念はありますし、置ける内容も限られてくるという懸念もあります。皆様の意見の中でどういう形がいいのか、もう少しいろいろ議論をいただければと思います。

(大森会長)

普通科では職業教育の意味で縛りが強いということで置けない科目等もある。総合学科のほうがもう少し自由に置けるということですね。

(寺本委員)

非常にわかりやすい資料をありがとうございます。

普通科と総合学科を置く場合と、普通科だけの場合で質問させていただきます。何年前に木本高校の学級数が減るときに、普通科と総合学科のどちらが減るのが、中学生にとっては悩ましいところでした。

現在の希望者の数を見ると、いつも総合学科がプラスの状況にあると思いますが、将来的に普通科・総合学科という2つで募集した場合は、同じような状況で1学級が減って5学級になるときにはどちらを減らすのかという懸念があります。

私が以前に思ったのは、入学のときには1つの学科、普通科で集めて、中身で分けることはできないか。現場から総合学科と普通科は学科が違うので難しいと言われたら、確かにそうなのかとは思いますが、1学級減るときにどちらを減らすという話になってきて、そこで教員の数も減ってくるだろうし、難しい面が出てくるなら、初めから1つの学科で募集して、その中でコースを分けるという方法はできないかという

のが意見です。

（事務局：宮路教育政策課長）

1つの学科だけのほうが、形式的には、その中の1学級が減るということになります。しかし、学級数が減れば教員数も減るので、教育内容についても同じようなことが起ってくると想定されます。複数の学科を置く場合でも、普通科のみでコース分けする場合でも、子どもたちの進路希望やいろいろなニーズを見ながら、考えていく必要があると思っています。

（田尾委員）

2～3割の生徒は、高校へ入る段階から既に難関大学を目指している子がいると思います。前は普通科で単位制がいいという意見を出しましたが、この資料を見て、その面では2番がいいのか6番がいいのか悩むところです。家庭や学校できちんと指導ができるなら、少しでも専門性のある総合学科のほうが今はいいのではないかという気がしています。

ただ、入学者選抜時に普通科で落ちるのが嫌なので総合学科を志願し、普通科が定員を満たさなかったという状況もあるように思います。将来的に1つの学校になるのであれば、普通科のほうの志願者が多くあり、不合格となった子どもが総合学科に入れるという制度が可能になるか教えてほしいです。

（大森会長）

普通科へ行きたかったが総合学科に行って、普通科の定員が割れた場合に、総合学科が定員を超えていたら普通科に変更が可能かどうかということですか。転学科という話だと思いますが。

（事務局：辻班長）

1年生が終わった段階で学んでくる中身も違ってくるので、転科することはできないと思います。入学段階では普通科で選抜しますが、普通科が不合格になった生徒が第二希望で総合学科に合格するということはあると思います。

（大森会長）

第一希望に総合学科を書いて第二希望に普通科を書いたとして、総合学科が定員を超えて普通科に回るという逆もあるということですね。

（谷合委員）

今、話題になっているのは県立高校のことですので、基本的には希望される皆さんを受け入れるべきであるという話はわかります。

一方で、普通科と総合学科ということで行くと、今、本校の場合はそれぞれの学科の目指す目標が違うことを中学校にはっきり伝えていきます。ですので、先ほど質問のあったことについて、普通科から総合学科、総合学科から普通科という第2希望の扱いが制度的には可能であることはわかりますが、高校に入ってから3年間で単位修得ができて卒業していけるかが重要です。普通科に求められる力をつけていけるか、総合学科に求められる力をつけていけるか。入口の部分だけでなく、出口の部分、その先の進路保障も絡んできますので、そこは誤解がないように受けとめていただきたいと思っています。制度的には可能であっても、単に定員が埋まればいいという問題ではないこともご理解いただきたいと思っています。

(田尾委員)

6番のような普通科だけという形なら、合格してから行きたいコースに希望を出すことに何も問題がないと思います。

ただ、2番の普通科と総合学科の場合、今の木本高校で考えると、普通科に十分合格できる学力があるのに、逃げて総合学科へ行っている子どももいるということをよく聞きます。そのため最終的に普通科に欠員がでることが今までにあったような気がします。ですので、そのような子どもだったら学力的にも十分ついていけるのではないかと思います、先ほど質問しました。

(大森会長)

谷合委員の言われることはよくわかります。子どものやる気もありますので、それは中学校の進路指導で対応していただくということですね。

(榎本委員)

まだイメージが湧きにくいところがあるので、どのように答えたらいいのかわかりませんが、特色をつける面から考えると普通科だけでいいのかどうか、他の学科も置くほうがいいのではないかとという部分で少し疑問が残ります。他地域から来てもらって生徒数を維持していくことも考えていかななくてはならないのではないかとということも頭にありました。なおかつ、進学についても特化していきたいと思っています。その辺のイメージが湧きにくいところがあります。

(大森会長)

まだカリキュラムの全貌が見えていないので、特色の部分が非常に抽象的になりますので見にくいかもしれません。一つ皆様にお伺いしたいのは、普通科プラス専門学科というのはいかがでしょうか。今、お伺いしていると普通科プラス総合学科、もしくは普通科のみというご意見が出ておまして、普通科プラス専門学科についての御意見は聞いていないですが、これについてはいかがでしょうか。

(中田委員)

普通科や総合学科は、木本高校も紀南高校も先生方もこれからの対応がしやすいと思いますが、普通科と専門学科になった場合、中学校の生徒・保護者にどういう専門学科がいいかというアンケートを採って、例えば、システム工学科とスポーツ福祉科になった場合、専門教科を教えられる先生を確保できるのかお聞きしたいです。

(大森会長)

専門学科の場合、教員の確保は可能かということですが。例えばスポーツ科というと、今、稲生高校の体育学部みたいな形でしょうか。

(事務局：宮路教育政策課長)

基本的に学科を県で設置することになった場合には、専門の教員の法定数は配置することになると思います。

(大森会長)

専門学科はもう少し検討したほうがいいのかということですか。PTAの皆様にもお伺いしたいのは、この地域の保護者の方は専門学科についてはどうお考えでしょうか。過去に木本高校に商業科があったことは聞いていますが、改めてこの地域に専門学科をつくるニーズはいかがでしょうか。

(司副会長)

総合学科でいろいろ選べるほうがいいという意見と、専門学科にして他地域からの生徒を集める形のほうがいいという2つの意見に割れている状態です。

(大森会長)

普通科のみというのはあまり出ていないということですか。

(司副会長)

普通科のみという意見はそれほど多くは出てないです。

(甫本委員)

学級数がある程度ある状況下では、生徒数も多く、それぞれのニーズがあるので、専門学科で特化する部分があってもいいかもわかりませんが、現状なり、今後の生徒数の減少を考えたときには、普通科の進学に特化するコースのニーズはあると思いますが、専門学科にしてしまうと、生徒がなかなか集まりにくい状況になってしまうのではないかと思います。ですので、総合学科の中でいろいろなニーズに応えられる形のほうが、どちらかと言えばいいのではないかと思います。

(徳田委員)

私も甫本委員と全く同じ意見です。私は話を聞かせていただき、2番か6番かと思っていました。専門学科の場合は、今までこの地域では昔の木本高校の商業科、家政科ぐらいしか経験がないということがありますし、どういう専門学科がよいかといわれると、スポーツや情報、機械工学ぐらいしか今のところは浮かびません。地域のことを考えると、他地域からたくさん子どもたちに来てほしいという願いはもちろんありますが、紀南地域に行けばこんな学科があると有名になるには、非常に時間がかかるのではないかと思います。

ここに住んでいる子どもたちの状況を考えると、総合学科にして、そこでいろいろな選択をしていくほうが合っているのではないかと思います。

私は小学校に勤務していますが、小学校の保護者にはイメージが湧かないような状況です。保護者がどういう思いで将来的に高校へ進学させたいと思っているのか把握しにくい状況ですが、イメージ的には今の普通科と、いろいろな選択ができて就職に対応できればという思いがあると感じたことはありました。

(大森会長)

委員である小中学校の校長先生お2人は、普通科のみか普通科プラス総合学科というご意見です。

(司副会長)

先ほど私が言った意見から、総合学科と専門学科で分かれています。この地域でニーズの多い専門性のある学科と、それ以外の総合学科という学科の置き方はできないのでしょうか。

(大森会長)

普通科、総合学科、専門学科の3つにするということですか。

(司副会長)

そういうことです。

(事務局：辻班長)

数のうえでは可能だと思います。6学級の学校を想定すると、専門学科には工業とか商業が多いです。総合学科が2～3学級、普通科が3学級というふうに非常に細分化されてしまいますので、数のうえでは可能ですが、それが果たしてこの地域の子どもたちが選びやすい学科の設置かという議論は必要になるかと思います。

(大森会長)

専門学科で教育内容に縛りがかかることによって、定員割れを起こしてしまうという悪循環に陥るのではないかという心配があると思います。

(久保委員)

相可高校は熊野市役所へも4人ぐらい就職していますし、測量関係の資格が取れるということがあります。例えば、林業関係の専門学科を設置したとして、他地域から生徒を呼び込むことは理想的ですが、現実的には非常に難しい面があると思います。

専門学科の関係で教えていただきたいのですが、この地域は今、少子高齢化の中で看護や介護の関係のニーズがありますが、県内で看護や介護の専門学科を設定しているところがあるかどうか。そして、そこで何かの資格が取れることが非常に魅力的なことではないかと思います。県内の専門学科で他地域からも生徒が多く来ているという成功例がないのかどうかも合わせて伺いたいと思います

(大森会長)

18ページの前の参考資料1を見ていただきながら、もう一度説明願えますか。

(事務局：長谷川高校教育課長)

もう一度、普通科と総合学科と専門学科の大きな違いを申し上げます。

専門学科は、専門科目を25単位以上、教育課程の中に置かなくてはなりません。1日6時間の授業で授業日が週5日であれば、平均的には3年間で約90単位を取得しますが、そのうちの25単位以上は専門科目の単位を必ず取得しなければなりません。

総合学科は、教育課程上に25単位以上の専門科目を設けておきますが、10単位取得する生徒もいれば、25単位取得する生徒もいるという形です。

普通科には、専門科目についての決まりはありませんが、多くの普通科において、専門科目を置いていたとしても、おそらく1学年4単位ぐらい、3年間の合計で12単位程度というイメージです。

先ほどご質問をいただきました看護師の資格については看護の学科になります。介護の関係は福祉の学科になりますので、違う学科です。看護の学科は、現在5年間で看護師を養成する課程になっています。県内では、桑名高校の衛生看護科で、高校3年間の上に専攻科の2年間をのせて5年間の教育を行っています。ですので、もし看護の学科を置く場合には、2年間の専攻科も設置した看護学科になります。

福祉については、現在、介護福祉士の資格が取れる県内の学校は、朝明高校、みえ夢学園高校、明野高校、伊賀白鳳高校の4校で、介護福祉士の国家試験を受験できる課程となっています。しかし、これは3年間で約90単位取得するうちの、53単位が専門科目となります。先ほど専門学科では25単位を必ず取得しなければならないと申し上げましたが、その倍以上の専門科目を履修するのが介護福祉士の国家試験を

受けるための課程となります。専門学科の場合は、資格と就職が結びついていて、専門科目の授業数が多くなります。

なお、1学級40人の中に看護20人と介護20人というように、両方の学科を置くことは、違う学科となりますので、細分化して置くことはできないこととなります。

(大森会長)

総合学科の飯南高校のような介護福祉系列の例を説明してもらえますか。

(事務局：長谷川高校教育課長)

現在、福祉関係の資格は国の制度改正の途中です。今までは34単位で介護福祉士の国家試験の受験資格が得られる制度でしたが、法改正により先ほど申し上げたとおり53単位になりました。今は移行期間で、飯南高校にはもともと34単位で介護福祉士の受験資格を得られる課程があったため、移行期間中は34単位のままでいいということになっています。しかし、移行期間が終わった後は、介護福祉士の受験資格を取るの難しくなるため、現在はなくなりましたが昔でいうところのヘルパーにあたる資格を取る内容に変えていくか、53単位を取得できるようにしていくかのどちらかしかないこととなります。

(久保委員)

介護福祉士の受験資格を得られる課程の学校は4つあるということでしたが、地域事情もいろいろあると思いますが、定員充足率はどうですか。

(事務局：長谷川高校教育課長)

4校ともほぼ定員が埋まっている状況です。ただ、専門科目を53単位も取得する課程ですので、介護福祉士を志す生徒の数によっては1、2名定員を割ることもありますが、非常に高い倍率になっていますし、ほとんどの学校が100%に近い介護福祉士の国家試験合格率で推移しています。

(久保委員)

今の説明でよくわかりましたが、介護福祉士を目指すコースを設置したとしたら、紀北地域も同じ状況にありますので、こちらへ通学してくる可能性はあるかなと思った次第です。

(廣畑委員)

今の件で、確認のため簡単に質問します。3番と4番の専門学科を設けた場合、最初に質問した生きる力をつけてもらえるのかということとも関わって、高校3年間の学習の後に4年次、5年次の専攻科の部分も設置できるということですか。

(大森会長)

例えば、看護学科を置くと、専攻科を置かないといけないという意味で、現状、この地域で専攻科を置くことができるのかというご質問だと思います。

(廣畑委員)

専門学科を設置すると4年次、5年次の専攻科を設置できるかという質問です。

(事務局：長谷川高校教育課長)

制度上は設置が可能ですが、果たして5年間の看護師養成の課程を置いて、定員を充足できるかどうかということが課題としてあるかだと思います。

(大森会長)

専攻科は、准学士の扱いになるので、設置のときにいろいろと問題があります。短大と同じことが要求される可能性があるのですが、制度的には確かに可能ですが、大学に勤める人間として、文科省の動きを見ますと、実際に設置となるとかなり厳しいのではないかと思います。法律上は可能ですので、申請はできるかもしれませんが、申請した後でどうかと言われると、わかりません。それは大学改革の中にも入ってきていますので、何とも言えないところがあります。これは私の意見です。

(倉本委員)

今いろいろお聞きしていて、私も迷うところです。前回、具体的な将来の自分の姿を十分に描ききれない中で受検する子どもたちが多いたということがありました。もちろん、そういった子どもたちばかりではないことは重々わかっていますし、何々になりたいという明確な目的を持っている子どもたちもいると思います。現実的な部分で考えた場合に、地域で1つの高校、それもそれほど規模の大きくない高校の中で、多様なニーズに応えきくことは不可能だと思います。この先、2校が1校になる。その1校でさえ危うくなる時が必ず来ます。そういった場合は、東紀州地域というような単位で考えていかなければならないかと思っています。

そういう中で、私は2番がいいかと思っています。例えば工業系、商業系の専門学科へどうしても行きたい、地元の高校よりもどうしてもそこへ行きたいというニーズが生じた場合は、尾鷲高校にシステム工学や情報ビジネス科があります。尾鷲市からこちらへ来たい子もいるでしょうし、現実として来ている子どももいます。

もう1点は、県内各地から紀南地域へ来る、この高校へどうしても行きたい。例えば、相可高校の食物調理科のような学科であれば、希望者は県内各地から来ると思いますが、私自身、その姿がなかなか思い描けない状況があります。より現実的なこと、10年先、20年先のことも想定して考えていかなければならないのかなと思います。

(櫻山委員)

専門学科については、先ほどからも言い尽くされていますが、私も基本的には専門学科を設置するのであれば、他地域から来てもらえる学科というのではなく、この地域の子どもたちのニーズに合った専門学科が必要であれば、専門学科を設置すればいいと思います。他地域にあるような学科をこちらにつくるというより、この地域で必要なのは「地域おこし学科」くらいしかないかと思っていますので、専門学科よりは総合学科や普通科のほうがいいと思っています。

もう一つは、総合学科についてですが、普通科に設置するコースよりも総合学科に設置する系列のほうが就職に対しての専門性の深まりが高いというのを聞かせてもらって、2番の普通科プラス総合学科と、6番の普通科のみとで揺らいでいます。しかし、今、紀南高校でやっている普通科の中でのインターンシップや職業教育と、木本高校でやっている総合学科の中での職業教育の深まりで、どちらがどうなのかというところで考えると、6番の普通科のみの中で進学にも職業のコースにも対応できるかと思っています。ですので、6番の普通科の入学者選抜を1本にして、1年次からコースを分けていく形がいいと思います。

(大森会長)

学科についてのこれまでの協議で、現実には1つにまとまっていないこともありますので、協議のまとめの方向を考えると、いただいたご意見を踏まえ、複数の長所・短所等を併記する形で今年度の協議のまとめとしていきたいと思っておりますが、いかがでしょうか。1つにまとめたほうがよろしいですか。本日、皆様のご意見をお伺いしたところ、1つにはまとまっていないと思っておりますので、また次回も検討させていただきたいと思っております。

もう一つ確認です。将来的に新たな学校を設置する場合の学校像等について、学科以外の部分で、これまでグローバル教育の充実、キャリア教育の充実、規範意識と社会性、安全・安心、活発な部活動、地域との協働、定時制のほうではさまざまな入学動機や学習歴をもつ生徒が学ぶ場ということでこれまで議論してきましたが、これ以外に何か付け加えられることはございますか。

現時点ではこのままということよろしいですか。

それでは、ここで5分程度休憩とさせていただきます。

～ 休 憩 ～

(大森会長)

それでは、再開します。

続きまして、「イ 設置場所の検討について」に移ります。資料4に基づいて事務局から説明願います。

イ 設置場所の検討について

(事務局：辻班長)

6ページの資料4をご覧ください。前回説明したものに少しつけ足したものです。前回は、現木本高校の校地、現紀南高校の校地、熊野市にある高台地域、御浜町の高台地域の4つの場所について、それぞれ中学校を起点とした通学状況がどうかというのが最初のところです。前回は5つの中学校について提示しましたが、不利な条件にある生徒のことを大切にするという考え方はわかるが、どこに子どもたちが多くいるかという観点も考えて、すべての中学校について資料を提示する必要があるとのご意見がありましたので、この地域にある12中学校すべてについての資料をつくりました。前回は地図上、交通機関の状況から見て、この4つの場所、もしくはそのいずれかへ通学しにくいのではないかとこの中学校を、具体的には新鹿中学校、神上中学校、五郷中学校、入鹿中学校、相野谷中学校の5つをあげていました。

見方については前回も説明しましたが、改めて簡単に説明させていただきます。一番上の新鹿中学校の欄をご覧ください。約25分間、38,200円とありますが、所要時間と年間交通費です。所要時間については、その下に内訳がありますが、JR、徒歩を利用して約25分間ということです。同じ新鹿中学校のところで、現紀南高校の校地までは45～55分間と幅がありますが、これは通学の所要時間ということで

往復を見ているので、電車によっては行きと帰りとの連絡待ちの時間が違う場合があります、45～55分間という幅が出ています。

熊野市内の高台地域と御浜町内の高台地域については、大きく幅を持たせてありますが、これは以前の意見集約においていくつかの場所をあげていただいていますので、その場所によって最寄り駅や最寄りバス停が異なり、当然そこまで歩く道のり、徒歩の時間も異なってくるため交通費も非常に大きい幅が出ています。

◎が付けてあるのは、表の上にメリットと考えられる要素と書いてありますが、県内のいろいろな高校の学校要覧等を見ますと、四日市市のようにたくさん高校があるところでも、山沿いのところへ通ったり、その逆もあったりして、90分間ぐらいかけて通学している生徒も結構いまして、90分間以内で通っている生徒が圧倒的に多くなるので、90分間ぐらいまでなら十分通える時間ではないかということで◎を付けています。それ以上の時間がかかるところについては、デメリットと考えられる要素を示す▲が付いています。

交通費の問題については、4つのうち、安いほうから上位2つについては、◎を付けています。

9～10ページについては、部活動をした後に帰ることも考えなければならないということで、18時頃まで部活をした場合に、帰れるか帰れないかということについてまとめてあります。▲の部分については不可能と書いてありますが、その下に「ただし、〇〇駅までなら可能」ということで書いてあります。

この地域には複数の交通機関がありますので、例えば、現状としてこの中学校区ならバスでなくJRで通っている生徒が多いということもあるかと思いますが、この資料にはそれぞれの中学校を起点にダイヤを見て所要時間の短いほうを選択して載せてあります。ですので、実際には交通費が安いということで、バスではなくJRを使っている例もあると思いますので、そのあたりをカバーするために、13ページ以降に参考資料として実際に利用できるバス、JRについて調べたものを全部あげてあります。必要に応じてこちらも参照していただけたらと思います。あくまでも最初の資料については、所要時間だけで見えています。裏づけ資料については、参考資料をご覧いただきながらご協議いただけたらと思います。

もう一度、資料の10ページに戻ります。10ページの一番下からは、前回も示した資料です。デュアルシステムの取組とありますが、インターンシップに行く場合に、公共交通機関を利用して行けるかどうか、行きやすいかどうかというものです。

11ページには、卒業後の進路にかかる状況予想というところは、現在の両校の指定校推薦ですとか、企業の求人を引き継ぎやすいかどうかということでまとめています。統合後の生徒の活動というところは、高校の統合の場合、小中学校と違い、統合した年度には、その年度の入学者のみが1年生となります。ですので、1年生だけ新高校で、2・3年生は前身の学校に通うこととなります。そうすると、部活動等を合同で行なう場合には移動することも考えなければなりませんので、そういう面のことを記載しました。

次の防災関係やその他のところも前回説明しましたが、地域の商業施設への影響、定時制の生徒の安全な通学についても、その他のところに記載しました。

12ページは、前回の協議の中で今ある2つの高校について、敷地面積や建築の時期、耐震工事の完了の有無、教室数等についても資料がほしいというご要望を委員からいただきましたので、前回は4つの比較という意味で提示していませんでしたが、載せさせていただきます。校地面積、いくつかある建物の建築の年月、耐震工事の状況、これはすべて完了しています。それから普通教室・特別教室数です。教室数については数字だけでは具体的なイメージがつかみにくいと思われましたので、後ろのところに木本高校、紀南高校それぞれについて校舎の配置図を掲載しています。

この資料の最初のところで12校の中学校をあげました。これはどの地域に中学生が多いかということから全部の中学校について出してもらいたいという話でしたが、人数については、19～20ページの上の段にそれぞれの中学校の過去5年間の卒業生数が出ていますので、これを参考にいただければと思います。

(事務局：宮路教育政策課長)

前回の協議会以降、県のほうで少し変化が出てきましたので説明を加えたいと思います。今、県では来年度の予算策定の作業をしているところです。その全庁的な方針として10月の初旬に予算担当部局から出された方針を簡単に説明させていただきます。

県有施設、いわゆる箱ものといわれるものの新設や建て替えについては、過去に発行した県債の償還が増加し、財政状況が極めて厳しくなっていることや、今後の人口減少を見据え、原則として当面、新たなものの着手を見合わせるものとしなさいという、全庁的な方針が示されました。ただし、現時点で施工事務を進めているものについては例外とされています。

新たな学校の設置場所にかかる検討をしていただくにあたり、こういうことを申し上げるとご意見が出しづらくなることもあるかと思えます。しかし、県の財政状況や方針が示されましたのでお知らせする必要があると判断し、あえてお伝えさせていただきました。ただ、この協議会としては生徒たちのいろいろな学習環境の構築に向けてご意見を出していただく場がありますので、今までどおりご意見をいただくところはいただければと考えています。

《協議、意見交換等》

(大森会長)

質問ですが、宮路課長が今、説明された件は、県議会ではどういう対応をされていますか。

(事務局：宮路教育政策課長)

県議会にもそういう方針を示して、いろいろ意見をいただいておりますが、今の状況からしてそうせざるを得ないということで、一部の新聞でも報道されていると聞いております。

(大森会長)

それでは、ご意見、ご質問をいただきたいと思いますが、冒頭にも申し上げましたが、場所のことですので具体的な地名は絶対にあげないようにお願いします。土地所

有者に迷惑がかかる心配があったり、利権問題が発生して混乱を招いてしまったり、場合によっては発言内容をめぐって委員個人の責任が問われる心配があることを踏まえていただくようお願いします。

(田尾委員)

前回の会議のときに全部の中学校の資料をつけてほしいとお願いし、大変な作業をありがとうございます。かなりわかりやすくなったと思います。先ほど新しい校舎を建てるのは厳しいと言われると、発言しにくいのですが、できれば全体的な中間点がこの資料を見ても望ましいのではないかと思います。ただ、それだけです。

(大森会長)

協議会は意見を出す場ですので、田尾委員が言われるように、これまでも話してきたような通学状況、協議内容、防災等を考えた場合に、現在の両校の中間的な位置に新設するのが望まれるというのは、一つの案としてあるのはわかります。

ただ、先ほど宮路課長から説明があったように、現状として新規の建物の建設については当面見合わせるということで、それが事務局だけではなく、県議会の全員協議会でも説明されているということでしたので、ここは両論併記でいくのがよいかと感じています。確かに保護者の皆様の気持ち、地元の方の気持ちもわかりますが、県議会でも説明されていることですので、もし既存の施設を使うのであれば、当然必要な改修や、防災面での必要な整備等はするべきだということはいれないといけないかを感じていますがいかがですか。

(田尾委員)

既存の建物でいくとなれば、よほど魅力度が高くないと、近いところへ行かせてほしいという声につながってくると思います。紀宝町の場合は新宮方面へ行きたいという意見がかなり多く出てくると思うので、できたらそうならないように、例えば木本高校の校舎を利用するとなったときにでも、向こうへ行くより時間がかかってもこちらの高校のほうが良いというような形に何とかしていくことが大事だと思います。

(大森会長)

もしくは紀南の校舎にしてということですね。子どもたちが安全・安心に学べる魅力的な校舎として整備としてほしいという意味ですね。

(田尾委員)

中途半端なものではなかなか魅力は出せないというのもありますので、並大抵の努力ではなく、かなり頑張らないとだめだと思います。

(樫山委員)

嫌なタイミングで県の状況を伝えていただきましたので、発言しにくいのですが、これまで協議をしてきて、まとまらなくてもこの協議会で話し合われたことを伝えていってほしいと思いますので、関係なく発言させていただきます。

少し気になっていることで質問ですが、11ページの統合後の生徒の活動というところですが、現実的には難しいのかもわかりませんが、新しい場所に新設校舎ができたときに、1年生だけが入り、2年生と3年生は既存の校舎にいるということは何とかならないものかと思います。例えば、建設が始まる何年か前の生徒募集の時点で、「あなたたちが3年生になったときには、この校舎に移ります」というようなことを

言っておいて、できたときに3学年そろった状態でスタートは絶対無理なのか。3学年入れる校舎をつくっているのに前の校舎を使う必要があるのかと思います。2、3年のスパンを持って、3年になったときにはこの校舎に移るみたいな感じの対応はできないのかと疑問に思うので質問します。

（事務局：宮路教育政策課長）

そういう例が今までありませんので、ここで即答はなかなか難しいです。基本的には木本高校、紀南高校に入学した生徒はその高校を卒業するものとして扱っていくのが条例上決まっています。例え説明してあったとしても、卒業資格をどうするか等の複雑な問題がありますので、少し検討させてください。今後、相談させていただきます。

（莊司副会長）

今の話で、新たな学校の校舎に木本高校、紀南高校に在籍している生徒が入るのは難しいとのことですが、編入試験のようなものをして生徒を移すことはできないのですか。

（事務局：宮路教育政策課長）

制度的には可能だと思いますが、生徒の意思がありますので、我々が勝手に決めてこちらに移りなさいという問題ではないと思います。先ほど樫山委員からご質問があったこと、入学の前にあなたたちは3年生になったらこちらへ移るということで運営が可能かということについては、場合によっては可能かも知れませんが、途中で編入試験をして移ることは難しいと思います。樫山委員の言われた形で移るのであれば編入試験は要らないと思います。場所だけ変えるという位置づけになると思います。

もう少し付け加えますと、極端な例ですが、新しい学校、仮に名前を東紀州高校というようなものをつくったとして、木本高校、紀南高校の在校生がその学校に入るとなると、3つの学校の生徒が同時に1つの校舎に入れるかということを考えなければならぬことになると思います。学校を変えることはすべきではなく、よほどのことがなければ入学した学校で卒業していくのが前提になりますので、同じ場所に全部移動して、そこで学ぶことが可能かどうかの問題かと思います。

（大井委員）

今の質問とつながっているかと思いますが、既存の学校を使った場合はどうなるのですか。一緒になったときに当然生徒数が増えますが、学校のキャパシティーとしては可能ですか。

（事務局：宮路教育政策課長）

実際に確認をしないとわからないですが、先ほどの件についても、例えば2、3年生がそれぞれ7学級あって、新たな学校の入学生が6学級となると、新しくつくる場合は、6学級対応の校舎しかつくりませんので、無理が生じる可能性もあります。

また、仮に今の紀南高校に統合した学校を置く場合に、木本高校の在校生も含めて同じ学年にできるかどうかは、施設のキャパシティーや、教育カリキュラム、授業開設の形態にもよって変わってくるので、移ることによって開設できない授業が出てくるのは本末転倒になると思うので、そういうことを確認しないと何とも言い難いです。逆に木本高校の校舎のほうが比較的大きいのは確かですが、それでも紀南高校の在校

生が各学年3学級入ったときにどうかということは、確認をしないとわからない状態です。

(廣畑委員)

先ほど会長がおっしゃった、新しい場所へ新設校をつくるということと、既存の施設を使うということを両論併記でいくということについてですが、既存の校舎は2つありますが、どちらの校舎を使うかもこの場で議論していくのですか。

(大森会長)

現状ではそれは難しいのではないのでしょうか。キャパシティーの問題もありますし、どのような教育内容でいくか、学科の内容によっても教室の形態が違ってきますので、その辺は難しいのではないですか。どちらかでと言われたときに、例えば6学級規模の学校を今の紀南高校の場所でと言われると、確実に教室を増やさなければいけないわけですね。すると、箱物の問題が出てきます。最終的に決定するのは三重県教育委員会ですので、教育内容、学科内容に合わせた校舎ということになると判断しますが、いかがですか。

(廣畑委員)

わかりました。私ども紀南高校学校運営協議会の委員の中には、いつまでこういう議論を続けているのか、地域の小中学生のためにも、議論ばかりしてはいけいと言われる方もいます。それにどう応えるかというところで、教育内容も夢を語るだけ、どこにどういう学校をつくるといっても、私たちには決定権もない。夢を語ったら、お金がないとどこかから聞こえてきた。このような状況で、地域の子どもの将来のことを本当に心配している人たちにどう応えるのかと突きつけられています。

(大森会長)

その件に関わっては、その他項で提案させてもらおうと思っています。この議題について、閉じた後にお話させてもらおうと思っていますところですよ。

設置場所の検討についてはいかがでしょうか。次へ行かせていただいてよろしいですか。

(山本委員)

設置場所については、所属団体の機関会議等で話をしているときに、御浜町や熊野市という話は出ていますが、具体的な場所は不明確ですので、そのところは言えませんが、既存の校舎を使うか、新設するかという話をしたときには、多くの人が、子どものためには新しいものを、新しいところにつくってやりたいという声が大きいです。ですので、新しいところへ新しい校舎を建てるほうが安全面でも、生徒のやる気の面でもいいのではないかと思いますので考えていただきたいと思います。

(大森会長)

それは協議のまとめに入れてもいいと思います。

(中田委員)

新設の場合は、両方の地域の方々や生徒に対する平等性があると思いますが、既存の校舎を使った場合、どちらの校舎に統合しても、どちらかの町が寂れてしまうことがデメリットしてあると思います。既存の校舎を使った場合、一方の使わなくなった校舎は、今まで県内でも統合した高校がありますが、町が寂れていかないうような使わ

れ方はされていますか。

(大森会長)

先行事例を紹介願えますか。

(事務局：辻班長)

例えば伊賀地域では、平成21年に伊賀白鳳高校ができました。伊賀白鳳高校は、上野工業高校と上野商業高校と上野農業高校の3つの学校が統合して、上野工業高校の場所にできました。ただ、高校の中には商業や農業の部分も要るので建物も一部建てました。統合の2年後に在校生がすべて卒業し、農業高校と商業高校が空きました。農業高校は現在、校舎の一部が取り壊されていますが、グラウンドにはヘリポートができて県の防災拠点として活用しています。農場は縮小されていますが、伊賀白鳳高校からバスを出して、週2回ぐらい農場に行っており、引き続き使われています。商業高校は、少し時間がかかりましたが、地元の伊賀市と協議をした結果、伊賀市に買っていただいて、消防署関係の施設に使うことになったと聞いています。

直近では、平成28年4月に名張青峰高校が開校します。こちらは名張桔梗丘高校と名張西高校を統合し、名張西高校の校地に名張青峰高校ができます。名張桔梗丘高校は、平成28年度から募集停止としますので、平成30年3月には使用しなくなります。その場所の用途は、地元名張市と県教育委員会との間で現在協議中ですので、まだ発表できる段階ではないですが、公共のために使う方向で考えています。

(荘司副会長)

保護者から出ている意見として、既存の施設を使うのであれ、新設するのであれ、どちらにしても設備を充実してほしいという意見はたくさんあがっていました。例えば、トレーニングルーム、パソコンルームなどを充実させてほしいということでした。

(寺本育委員)

資料に木本高校、紀南高校の建築年月を書いていたのでありがたいですが、高校の建物は何年ぐらいで建て替えるのかお聞きしたいです。

(事務局：宮路教育政策課長)

一般的にRC構造と言われる鉄筋コンクリートの場合、50～60年ぐらいが耐用年数とされています。ただ、多くの学校では耐震補強を施していますので、老朽化に対する改修をしながら使えるものは使っていくようにしている学校もあります。

(寺本育委員)

県内に新校舎を建て替えた高校の事例は特にはないですか。

(事務局：宮路教育政策課長)

老朽化であったかどうかのいきさつは記憶していませんが、最近では伊勢高校が3年ぐらい前に建て替えましたが、ほかの高校については記憶にありません。

(榎山委員)

既存の施設の状態もありますが、新しい高校に望むこととして、学力の面、就職やキャリア教育の面、部活動の充実の面等、これまでもいろいろと議論されてきています。特に部活動の関係で他地域に行く子どもたちも多いということで、そういった子どもたちのニーズにも応えられるような施設環境を整えた学校をぜひつくっていただきたいと思います。

ここ数年の中であったことですが、紀南高校には柔道部がないということから、柔道部のある木本高校に行った子もいましたが、3年生のときには部員がその子1人になってしまいました。一方の紀南高校には未経験者ですが下級生が5人も入って、また柔道部ができました。このような形の振り回され方をみたときに、部活動の充実ということからも、校舎の施設・設備については書いてくれていますが、グラウンドや体育館も含め、木本高校も紀南高校もこの地域の部活動のニーズに対応できるような施設にはなっていないと思いますので、新たな場所にそのような施設の環境を整えた学校をぜひつくっていただきたいと思います。

(榎本委員)

資料1 1ページの防災関係のところでは津波浸水予測が、木本高校で0.3～1m、紀南高校で2～5mということで、その下に防災対策の充実が必要ということも書かれています。具体的に何をどのように充実させる必要があるのかということと、改修にどのぐらいの費用を想定されているのかについて、さまざまな判断をしていくうえで教えていただきたいと思います。

(大森会長)

費用については難しいとは思いますが、回答願います。

(事務局：宮路教育政策課長)

具体的なシミュレーションまで至っていないので、費用も含めたものまでではないです。想定しているものとしては、例えば、避難路のつくり直しや津波を一定程度防げるものを校舎周りに整備すること等が案としてあります。具体的に検討したわけではないので、今後、もし既存の施設を活用する場合には、そういう検討も可能な範囲でしていかなければいけないというところです。

(大森会長)

逆に、榎本委員たちからこのような防災対策をしていったほうが良いという提案があったほうが、事務局も進めやすいと思います。

この件につきましては、ここで終わらせていただいて、その他の項に移ります。事務局から新たな提案があるとのことですので、説明願います。

(2) その他

(事務局：宮路教育政策課長)

本日の協議も含め、これまでたたき台をもとに学校のイメージ等についてかなり意見を出していただけてきました。学科の部分はこの先も検討を続けることになっていきますが、学校像等の大枠については、この場で合意いただけているかと思っています。

これまでにいただいたご意見の中には、具体的な教育内容やカリキュラム等は、事務局や学校でもう少し細かいところを考えていただく必要があるというものもありましたし、本日も廣畑委員から具体的なところを早く進めなければならないとの意見をいただきました。このようなご意見を踏まえ、より具体的な検討をしていくために、木本高校、紀南高校の教職員や県教育委員会事務局の職員でワーキングのような組織をつくって検討していきたいと考えています。場所や統合年度は決まっていますが、

廣畑委員が言われるように急に発表というわけにはいきませんので、準備をする意味で検討する形を整えていきたいと思えます。その方法や人選については、両校の校長先生や大森会長と相談しながら決めさせていただき、そこで話し合った結果を、この協議会に報告させていただいて、またご意見をいただくような形で進めていきたいと考えています。このことについてこの場でご了承をいただければと思えますが、いかがでしょうか。

（大森会長）

ただいま、事務局からワーキング設置についての提案がありました。早くから将来的に新たな学校を設置する場合の学校像をより具体的に、しかも特色を明確にする。本日の中でも具体的に見えないというご意見もありましたので、そのための協議を行いたいという提案です。ご了承いただけますでしょうか。

《協議、意見交換等》

（甫本委員）

前回、新しい学校像のところで地域との協働をと言いましたが、ここにもある新たな学校を設置する場合の学校像というのは、いろいろな思いを持ち寄りながら凝縮されているものですので、反対する部分はないと思えます。

ただ、今の議論のまま進んでいくと、絵に描いた餅にならないかというのが私の一番危惧するところです。三重県でもこの地は最南端であって、子どもたちも木本高校、紀南高校あるいは新宮の私立学校という本当に限られた選択肢しかないような状況にある中で、高校の教職員や県教育委員会事務局の職員とでそういう組織をつくっていくということでしたが、それだけでこの問題を解決していけるのかというところでは、非常に不安を持っています。

前回、会長から地域との協働の部分でもそろそろ考えていかなければという心づもりでいるとお聞きしたので、今回、そういう視点での話も出てくるか、提案もあるかと思っていたのですが、その部分がなくて残念に思っています。次回の予定は2月ですがそういう話ができるのかどうかということが心配です。その辺をどう考えているのかお聞きしたいと思います。

（事務局：宮路教育政策課長）

前回、地域の意見を広く聞いていく必要があるということも言われていたと思えますし、デュアルシステムのように地域でも子どもたちを教育いただいて育てていくという協働の仕組みも、当然地域の協力なしに勝手に絵に描いてもできないわけですが、今のご質問は後者のほうでよろしいのでしょうか。

（甫本委員）

デュアルシステムはよくわかります。今も紀南高校、木本高校もインターンシップで地域と連携しながらやっていますので、そこをもっと深めていけばいいと思えます。それよりも県立高校と市町の行政が相容れないものではなく、お互いに近づいて県立高校に関して市町の行政ができること、学校運営のうでがかかわれる部分、学校の中に入ってカリキュラム云々ということではできないでしょうが、いろいろな視点でお互

いに協力していけることはあるような気がします。

(大森会長)

甫本委員が言われるのは、この協議の中や、今後の具体的な協議の中にも地域との協働という意味でアイデアを入れていくべきではないか、地域の方にもどんどん入ってもらったほうがいいのではないかという意味ですか。

(甫本委員)

地域の方にたくさん入ってもらうわけにはいかないと思いますので、その代表である首長は必要ではないかと思います。今後の紀南地域の教育に関しては危機的な状況にあると思うので、そこをどう捉えているか、私にはそのあたりが全然伝わってこないです。

それと、そこに書いてある4つ、規範意識、社会性、活発な部活動、安全・安心、地域との協働とありますが、私は、地域との協働をもっとクローズアップしていかないと、新たな学校をつくりあげていくのは非常に難しいと思っています。

(大森会長)

松阪に飯南高校がありますが、そこは「飯南高校応援団」という形で地域の方々が高校の応援団をつくってバックアップをしています。そういう意味だと私は解釈しましたが、そういう意味でいいですか。地域がバックアップして盛り上げていくようなシステムにしていかなければいけないという意味ですね。

(甫本委員)

いろいろな施設・設備の部分でも、県立高校は県が建てる施設だということもあるとは思いますが、市町が建てられる高校生が利用できるような施設・設備であるとか、補助であるとか、そういうことも含めてです。すぐには浮かびませんが、いろいろなアイデアが出せるのではないかと思います。

(事務局：宮路教育政策課長)

学校をつくっていく上での地元の理解は当然大事だと思いますし、市町の協力がなくてはやっていけないことだと思いますので、そういう観点も入れながら協議をしていきたいと思います。首長に出席いただくかどうかについては、今のところは行政の代表として各市町の教育長に出席いただいております、各首長にも情報は伝わっているものと認識していますので、現段階ではそういう形で進めていきたいと考えます。ただ、おっしゃるように新たな学校をよくしていくためには、地元の協力をいただかなければ難しいと思いますので、そういった面でいろいろな話し合いや情報共有をしながら進めていきたいと思っています。

(大森会長)

倉本委員、西委員、何かご意見はございましょうか。

(倉本委員)

地域の代表者を交えた建設的な話の必要性は、私も十分理解できます。

ただ、それぞれの首長レベルになってくると、非常に複雑になり、新たな問題も生じてくることを懸念します。そういうことを私は非常に心配しています。

地域の方々を交え、みんなで子どもたちの進路を保障していこう、子どもたちの夢をかなえてあげようという話し合いであつたら、すごくいいと思います。

(西委員)

今は、ほとんどの子どもが高校へ進学しますし、また、授業料が無償になったことから考えると、希望する子の夢をかなえてあげたいというつもりで私もここへ来させてもらい、発言させてもらっています。

ただ、町を代表してというところまで言われると、事前準備はしておりませんし、私の側から町を見て、学校を見て、子どもたちを見て、地域の人たちを見てという立場では来ますが、逆から見ても十分それで役割を果たしているかと言われると、それは怖い話です。私はそういったところまでは責任を負ってここには参加できないと思っています。

ほかに本筋では、先ほど宮路課長からワーキングという話がありましたが、今日の内容で言えば、1ページの上の項目と下の項目の2つを、もっと具体的な形で提案していかないといけないと思います。前半はほとんどが質問で、よくわからないまま、何となく意見を言わなければならないといった中で出された意見が議事録として残ります。県がこの協議会を開いているので、結果についてはどのような形でも活用はできるでしょうが、本当に今後のこの地域の人、あるいは子どもたちのために責任を持つ発言となるのか、私は自信がないので黙っていました。

それなら、むしろ何年か前に木本高校に総合学科ができたとき、あるいは紀南高校をコース制にしたとき、それからずっとやってきて、その内容においてどうであったかという総括から入る。あるいは、学科の設置に関しては最終的に県教育委員会に権限があるということでしたら、それについて本日の1ページの上の項目で言えば、下から3つの「○」について県教育委員会としてはこう考える。だから、本日の資料にあった6つの中でもランクを付けると、こういった順序になるのではないかとといった提案があると、この2時間半という時間はもう少し短縮されて、中身の濃いものになったのではないかと思います。

注文ばかりが多いわけですが、ただ、一番よくわかっているところから精一杯に総括したものが出来ないと、素人と言ったら私以外の方には失礼ですが、今回の場合はちょっと違うのではないかと気がずっとしていました。

それから、過日、隠岐島前高校に行ってきましたが、平成20年に17人しか入学者がいなかったのが、今では随分増えています。今年、東京で行った入学者説明会には100人を超える参加者があったということを聞くと、今さら遅いのですが、夢を与えている大人が地域にいるということが大変気になっていまして、そういう方向に行くのであれば、私もいくらでも一緒にやっていきたいと思っていますことを付け加えます。

(大森会長)

隠岐島前高校については、この前もテレビのドキュメンタリーで30分番組がやっていた。

ワーキングについては、ご承認いただいたということによろしいでしょうか。

ワーキングで更に具体的に深めていただきたいと思いますし、もう少し具体的になければイメージがわからないのかなと思いますので、私も心がけますが、ご協力をお願いします。

以上ですが、その他、よろしいでしょうか。

(田尾委員)

何度も同じことを言って申し訳ないのですが、私たちは安全な場所に新しい学校を建てるというイメージでずっとやってきました。既存の学校の校舎を利用してという形となると、どうも力が入らないというか、新しい学校を、いい学校をみんなで楽しくつくろうという気持ちになれません。どの場所になっても同じ気持ちにならなければいけないのはよくわかっていますが、そういった面もほとんどの委員が同じ考え方だと思います。予算の面もあるのはよくわかりますが、具体的にもっと進めようといっても、このままだと2、3年経って、既存の校舎を利用しないとしようがないという形になっていくと思います。もっとスピーディーに何とかみんなで協力し合いながら進めていきたいと思っています。

(大森会長)

予算のことは本当にジレンマで難しいです。私も三重中京大学時代からいつも感じています。三重県については、財政の状況が他府県の状況と違いますので、そこは私も苦い思いをして名古屋に通うようになりましたので、田尾委員のおっしゃる意味、気持ちは私もわかります。ただ、現実としてもある問題は受け入れなければならない部分もあると思います。次回にどういうふうにとどめるかですが、田尾委員のご意見はわかりました。

(莊司副会長)

私は今年から入ったのでよくわからないのですが、学校のイメージのところに「グローバル教育の充実」とありますが、グローバル教育の「グローバル」とはどういった教育をすることでしょうか。

(大森会長)

グローバルなので国際コミュニケーションです。世界のいろいろな方々とコミュニケーションがとれる能力を育成する語学教育への対応、また、以前の協議では観光といったことも出てきたと思います。あるいは、逆に出ていくほうで輸出ということも考えられるだろうと思います。

南アメリカから植物を輸入して、この地で育てて、それに付加価値を付けて日本で売る農業をしている南紀グリーンハウスの芝崎さんの話を例に、輸入をしてここに産業を根付かすこともできるだろうし、人が来て対応することもできるだろうしという意味で、世界とのかかわり等を意識した教育ということでもあります。ですから、語学教育もあるだろうし、輸出入ということもあるだろうし、多文化理解ということもあるだろうという意味です。

(莊司副会長)

私が聞いた「グローバル」というのは「世界基準」ということでしたが。

(大森会長)

グローバル化というのは国境がなくなっていく、地球が1つになっていくという意味ですので、ここで言うグローバル教育は、いろいろな国や地域の人たちと行き交うという意味の教育です。そういうことのできる人材を育てようということなのです。

(司副会長)

今年のPTAの全国大会に参加したときに、「国際化」と「グローバル」は違うと聞いたのですが。

(大森会長)

ここでのグローバル教育というのはそういう意味ではなくて、人々がいろいろなところから来たり、物流ができるようになってきたりしてきているので、そういうことに対応できる人材を育てようということを意識しています。ここで使っている言葉はそういう意味です。

(司副会長)

外国とのやりとりというものではなくて。

(大森会長)

外国とのやりとりも入ります。今のTPPで言われているように貿易においても国境がなくなっていくので、地域にいながら海外との物流や人との交流を自分たちからできるような力を育成する教育もここに入れましょうという意味です。

(事務局：辻班長)

世界的なものの見方、地球規模的なものの見方で、世界にはばたく人材を育てるという考え方もありますし、そのようなものの見方を持ちながら、地域のよさを発信したり、地域で活躍したりする人材を育てるという考え方も「グローバル教育」の側面であると考えられます。地球的な視野を持ちながら地域で活躍する、もしくは地域のよさ、地域の文化などを理解するのもグローバルですので、大変広い意味だと思います。

(司副会長)

その広い教育をどのようにしていくつもりでしょうか。

(事務局：辻班長)

具体的な教育内容については、これからいろいろ考えていかなければいけないことです。この場でご意見もいただきながら、先ほどワーキングの話もありましたが、学校の中でも、両校の教員が集まった中でも、どのようにしていったらいいか協議していくのがこれからになるのではないかと思います。

(大森会長)

よろしいですか。

(司副会長)

逆にイメージが更に遠のいてしまいました。

(大森会長)

それでは、進行を事務局に戻します。

4 連絡事項

(事務局：宮路教育政策課長)

大森会長、協議を進行いただき、ありがとうございました。
時間も超過してきましたので、簡単にお礼を申し上げます。

前段の学科のことについては、いろいろと質問やご意見をいただき、意識もより深めていただけたかと思えます。また次回、より深めた協議をお願いしたいと思っています。

後段の設置場所等の検討につきましては、冒頭に県の財政状況のことを申し上げたのは非常に心苦しいところではありますが、これを伏せておくのはどうかという気持もありましたので、あえて伝えさせていただきました。ただ、皆様からのご意見は、この協議会の場でいただいたご意見として頂戴したいと思えますので、今後ともよろしくをお願いします。

本日はどうもありがとうございました。

(事務局：西)

それでは、事務的な連絡を3点させていただきます。

1点目、旅費等に関する書類をまだ提出いただけてない方は、お帰りの際にご提出ください。なお、学校籍の委員におかれましては、開催案内でお知らせした方法により旅費の請求をお願いします。

2点目、駐車券の無料化处理についてです。入口に機械を置いていますので、お帰りの際に処理させていただきます。

3点目、第4回の協議会についてです。第4回協議会は、2月16日（火）か、2月19日（金）のいずれかで開催させていただきたいと考えています。会場はこの会場が埋まっています、仮予約が入っているところをキャンセル待ちで予約させていただきましたが、本日確認しましたところ仮予約が本予約になったということでしたのでこの会場を使うことができません。ですので、会場は、県熊野庁舎大会議室を使う予定です。開会時刻は本日と同じ18時30分です。年内を目途に皆様方に連絡させていただき、日程調整したいと思っていますので、よろしくをお願いします。

それでは、これもちまして閉会します。お気をつけてお帰りください。ありがとうございました。